

実科から本科に組織変更した高等女学校と音楽教員の需要

坂本 麻実子

Japanese Girls'High Schools reorganized from Homemaking Course
to Jeneral Course and the Demand of Music Teachers

SAKAMOTO Mamiko

E-mail : msakamot@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：音楽教育，音楽教員，高等女学校

keywords : Music Education, Music Teacher, Girls'High School

はじめに.

明治32年(1899)、「高等女学校令」が公布され、全国に庁府県立の高等女学校の設置が義務づけられた。同43年(1910)、さらに女子の就学率を上げるため、「高等女学校令」が改正され、本科(普通教育)の高等女学校(以下、高女と略す)に対して、裁縫を重視し、主婦教育を行う実科高等女学校(以下、実女と略す)の設置が認められた。実女は、高等小学校に併置することができ、教員も高等小学校との兼務が可能なので、高女よりも設置が簡単であった。そのため、実女は、大都市よりは地方で、府県内では郡部で相次いで設立され、郡立、町立、町村組合立が多かった。

しかしながら、実女の生徒は、「実科志望だから実科に進むというよりはむしろ近くに実科しかないから、あるいは高女に入れなかったからという理由で実科に入学するケースが多かった」(高等女学校研究会1990:30)。そのため、大正時代以降、実女が新設される一方で、高女への組織変更を図る実女が出てきた。特に、大正10年(1921)に郡制の廃止が決まると、実女から高女へ、特に県立高女への変更が加速した⁽¹⁾。(一例として大正10年に実女から変更した高女36校を表1に示す。)大正15年(1926)には、大正年間に全国で設立された道府県立高女275校のうち、実女から変更した高女は110校あり、全体の4割を占めるという統計もある(高等女学校研究会1990:142)。したがって、一口に高女と言っても、当初から高女として設立された高女(以下、「元から高女」と言う)と、実女か

ら変更した高女(以下、「元実女」と言う)の二系統があった。なお、実女は昭和18年(1943)の「中等学校令」で廃止され、女子教育は高女に一本化された。

ところで、実女から高女への変更は、音楽教育にも影響した。実は、高女と実女の音楽教育には格差があった⁽²⁾。まず、教科名が異なる。高女は「音楽」であるが、実女は「唱歌」である。したがって、実女の音楽教育は小学校の唱歌の延長であり、高女で行うような合唱やオルガンの指導は想定されていない。また、授業時間数も異なる。高女では、4年制、5年制ともに、音楽は全学年必修で週2時間である。一方、実女では、4年制の場合、唱歌は1,2年次に週2時間、3年制の場合、1年次に週2時間であり、2年制の場合は唱歌を欠くことができる。しかも、実女の唱歌は、併設の高等小学校教員が担当してもよかった⁽³⁾。したがって、実女から変更した高女には、音楽の専門的訓練を受けた教員が求められた。

「元実女」の増加に対して、音楽教員養成も無関係ではいられないだろう。折しも、東京音楽学校(以下、東音と略す)は、大正11年(1922)4月から昭和7年(1932)3月まで、既設の甲種師範科(以下、甲師と略す)に加えて、速修の第四臨時教員養成所(以下、第四と略す)を付設し、音楽教員の増産を図った(坂本2008)。第四の設置期間は、「元実女」が増加した時期と重なっている。そこで、大正から昭和初期にかけて、実女から高女への組織変更に伴う音楽教員の需要について、東音の甲師卒や第四卒の配置状況と絡めて考察する。

表 1. 実科高等女学校から変更した高等女学校と音楽教員（大正10年）

地区	庁府県	(設置者) 学校名・創立年	音 楽 教 員
北海道	北海道	(区→T12市) 札幌区立高女M40	A宮崎キイ
東北	宮城	(郡→T10県) 涌谷高女T8	A松坂とよ
関東	東京	(郡→T12府) 南葛飾高女T5	B坂口勇造[T8甲] (音, 英)
	東京	(郡→T12府) 荏原郡立高女T7	A古谷幸一[T6器, T8研修器]
	茨城	(郡→T11県) 下館高女M45	B黒川敏政(唱, 体, 理)
	群馬	(郡→T12県) 北甘楽郡立高女M44	B山田善作(唱, 教)
	埼玉	(組→T10県) 久喜高女T8	A小林好三
甲信越	新潟	(郡→T11県) 巻高女T2	B岩田吉次(地, 歴, 唱, 商)
	新潟	(町→T14県) 三條高女T10	A今城孝子
	富山	(町→T10県) 魚津高女T2	B森本ふみ(音, 歴, 習)
	富山	(郡→T12県) 中新高女T2	B堂本ます(英, 唱)
	石川	(郡→T12県) 鹿島高女M44	B鹿島カノエ(家, 裁, 体, 音)
	石川	(郡→T12県) 能美高女M44	B原谷とよ(国, 音), 中野サチ(国, 音, 体)
	石川	(郡→T12県) 江沼高女M44	A立野與一
	福井	(郡→T12県) 大野高女T5	B小林コスエ(裁, 作, 音)
福井	(郡→T12県) 小浜高女T8	B袋井栄子(英, 音)	
中国	鳥取	(郡→T10県) 倉吉高女T3	A黒部峯蔵[M29専]
四国	徳島	(郡→T10県) 富岡高女M45	B小泉房(英, 音)
	徳島	(郡→T10県) 撫養高女T2	B岡本安晴(習, 国, 音)
	徳島	(郡→T12県) 三好高女T9	Cなし
	香川	(郡→T11県) 大川T3	B木村タミ(家, 図, 音)
	香川	(郡→T11県) 木田高女T2	B松原ハル(体, 音)
	香川	(郡→T11県) 三豊高女M44	B平田ヨシエ(理, 数, 唱)
	愛媛	(郡→T11県) 宇摩高女T1	B結城藤枝(国, 体, 唱)
	愛媛	(町→T11県) 八幡浜高女T1	B三好カツ(音, 体)
九州	大分	(組→T12県) 宇佐郡高女M45	B伊賀崎ヒデ(作, 家, 手, 音, 図)
	大分	(組→T12県) 北海部高女M44	B阿部宇六(音, 体)
	大分	(郡→T10県) 佐伯高女M45	B村瀬久子(地, 国, 唱)
	大分	(組→T12県) 杵築高女M44	B野上眞那夫(唱, 数, 理)
	大分	(組→T12県) 日出高女T6	B藪塚カヲル(体, 音)
	佐賀	(組→T13県) 小城高女T3	A小林多治
	熊本	(郡→T10県) 球磨高女T7	B犬童信蔵[M38甲](唱, 地, 歴, 作文)
	熊本	(郡→T12県) 天草高女T1	B堀田一十治郎(唱, 国, 体)
	熊本	(郡→T12県) 下益城高女T7	A中村久子
	長崎	(郡→T12県) 五島高女T2	B姉川八千代(地, 唱, 裁)
	長崎	(組→T12県) 対馬高女M44	B山室鈴(唱, 体, 裁)

備考：『中等諸学校職員録』大正10年版および『思い出の高等女学校』より作成。Aは音楽の専科教員、Bは兼任教員、Cは音楽担当教員がないことを示す。()内に担当教科を略記する。東音卒の教員は[]内に卒業年と学科を略記する。

1. 実科高等女学校における音楽愛好

一般に、実女では音楽教育に対する認識は高くはなかった。しかし、実女にも音楽を愛好する気風があった。

秋田県の能代実女（大正3年創立、昭和2年に県立高女）では、当初、唱歌を実施せず、その必要も

感じていなかった。しかし、大正8年の卒業生の一人は「念願の」唱歌の授業の開始を次のように回想している。

三年生のとき、松橋カチ教諭が結婚記念にオルガンを寄贈して退職なさり、念願の唱歌の授業ができるようになった。当時の町の学務委員は、「年頃の

娘に音楽はいらぬ。歌を教へて何になりますといふ論調」で、オルガンの購入費を計上してくれなかった。(秋田県立能代北高等学校1984:16)

群馬県の吾妻実女(大正10年創立,同12年に県立高女)にはオルガンはあったが,最初は普通教室で,のちに講堂の一隅で唱歌の授業を行った。毎年,どの学年にも教えられたのが,主婦養成が目的の実女らしく「榮養の歌」であり,生徒たちは「覚めて朝日を仰ぐとき 鬼お(を)もひしぐ力あり」という歌を卒業後も忘れなかった(群馬県立吾妻高等学校1971:102)

新潟県の佐渡では,島内に高女がなく,実女が地域の音楽活動の拠点になっていた。佐渡実女(明治44年創立,大正11年に県立高女)では,創立時に地元の開業医からピアノを寄贈されたので,大正5年からは相川実女(明治44年創立,大正12年に県立高女)や地域の高等小学校の女生徒を動員し,郡内唯一の音楽会である「唱歌大会」を開いていた。大正6年卒の隅田スエは,「郭公や露営の夢や須磨の曲各地小学競ふ歌声(音楽会盛大なりき)」と詠んでいる。また,大正10年卒の北見ヒデによれば,次に記すように,四部合唱で参加したという。

島内各小学校の生徒らが赤いネルの脚絆,手ごてをつけ賢明に美声を競った。長い袴をはいた引率の女教師は単音伴奏であった。その中で,私たちは「流浪の民」の四部合唱をして少々得意気分であった(新潟県立佐渡女子高等学校2004:107-108)。

佐渡実女によるシューマン作曲「流浪の民」の四部合唱が小学生の斉唱と対比されている。小学校の女教師の「単音伴奏」とは,歌の旋律を右手でなぞって弾いているのだろう。一方,佐渡実女の「流浪の民」の伴奏者は,少なくとも両手で弾いているのだろう。音楽会は実女生たちの晴れ舞台であった。

上記3校には,唱歌の専科教員はいない。大正10年を例にとると,能代実女では,中村ハナが裁縫,手芸,唱歌を教えていた。吾妻実女では,上原はやが家事,行儀作法,唱歌を教えていた。佐渡実女では,加藤智恵が体操,唱歌を教えていた(『中等教育諸学校職員録』)。それでも生徒の音楽への関心は総じて高く,実女には音楽教育への潜在的なニーズはあったと見てよいだろう。

2. 音楽教員の配置からみた「元実女」

高女を設立するには,必修科目の音楽の教員の手配が必要である。しかし,表1を見ると,「元実女」は,変更の時点で音楽教員の手配を必ずしも完了していない。表1の「元実女」のうち,高女変更時に東音卒の音楽教員を確保できたのは東京の2校(南葛飾高女,荏原郡立高女)と地方の2校(鳥取県の倉吉高女と熊本県の球磨高女),合計4校にすぎない。大部分の「元実女」では,音楽は,音楽を含む複数の科目を担当する教員が受け持ち,高女と名乗っても音楽教育の実態は実女と変わらない。そこで,表1の「元実女」の中から久喜高女のある埼玉県を選び,大正10年,同15年,昭和5年の時点において,実女,「元実女」,「元から高女」の音楽教員の配置を年代順にみていく。

表2に示すように,埼玉県では,「高等女学校令」公布により,明治33年に県庁所在地に浦和高女を設立した。次いで,同44年に県北部に熊谷高女,県西部に川越高女を設立した。しかし,この3校を設置すると,明治,大正年間には高女の新設はストップした。一方,実女は早くも明治44年に粕壁実女が開校して以来,郡立,町立,組合立実女の新設が続いた。これらの実女の中から,大正年間には久喜実女,忍実女(のち北埼玉実女)の2校が県立高女に変更した。昭和にはいると,3年には小川実女,5年には粕壁,秩父,児玉,飯能,越ヶ谷の5実女が一挙に県立高女となり,埼玉県の県立高女は11校になった。以後,埼玉県の県立高女の増加は浦和第二高女(昭和9年新設)1校のみである。

表2によれば,大正10年の時点では,東音卒(甲師卒または第四卒)の教員は,県内では名門とされる「元から高女」の浦和,熊谷,川越の3高女で教えている。実女では一人も教えていないし,秩父実女ではそもそも唱歌を実施していなかった。大正10年に「元実女」となった久喜高女は東音卒の教員を手配できなかった。次に大正15年の時点では,東音卒の教員は,「元から高女」の浦和,熊谷,川越の3校と「元実女」の久喜高女で教えている。「元実女」の忍高女は東音卒の教員を手配できなかった。実女の中では,粕壁実女が東音でも唱歌教員を養成する乙種師範科出身者を採用した。秩父実女では未だに唱歌を実施していない。さらに昭和5年の時点では,東音卒の教員は,「元から高女」

表2. 音楽教員からみた埼玉県的高等女学校と実科高等女学校（大正10年, 15年, 昭和5年）

大正10年	大正15年	昭和5年
1 (県) 浦和高女 M33 A 諏訪光子 [T5 甲]	1 (県) 浦和高女 A 小澤千年 [T15 甲]	1 (県) 浦和高女 A 松本益 [T13 甲]
2 (県) 川越高女 M44 B 中村籍 (音, 遊) [T8 甲]	2 (県) 川越高女 A 安藤フジ [T3 甲]	2 (県) 川越高女 A 嶺脇カツ [S2 臨]
3 (県) 熊谷高女M44 B 大友栄 (音, 作) [T9 甲]	3 (県) 熊谷高女 A 今井幸恵 [T8 乙, T12 甲]	3 (県) 熊谷高女 A 今井幸恵 [T8 乙, T12 甲]
4 (県) 久喜高女 T8 ※T10 (組) 実女より変更 A 小林好三	4 (県) 久喜高女 A 矢部登美 [T14 甲]	4 (県) 久喜高女 A 矢部登美 [T14 甲]
5 (郡) 北埼玉実女 T4 ※(町) 忍実女として設立 B 足立幸造 (数, 図, 体, 習, 唱)	5 (県) 忍高女 ※T14実女に変更 B 足立幸造 (音, 習)	5 (県) 忍高女 B 市来フメ (音, 体) [T13 臨]
	6 (町) 小川実習女学校 ※S2 (町) 実女に変更 教員は不明	6 (県) 小川高女 ※S3 (県) 高女に変更 A 増田操 [S2 甲]
7 (町) 粕壁実女M44 A 杉浦三江	7 (町) 粕壁実女 A 萩原美代三郎 [M39 乙]	7 (県) 粕壁高女 ※S5 (県) 高女に変更 A 石原儀平
8 (町) 秩父実女M40 ※ (町) 裁縫女学校として 設立 C なし	8 (町) 秩父実女 ※T8 (町) 実女に変更 C なし	8 (県) 秩父高女 ※S5 (県) 高女に変更 B 秋田トク (体, 音)
	9 (組) 児玉実女T11 B 内田吉枝 (体, 音)	9 (県) 児玉高女 ※S5 (県) 高女に変更 B 内田吉枝 (音, 遊, 作)
	10 (組) 飯能実女T11 B 長島松枝 (国, 歴, 音)	10 (県) 飯能高女 ※S5 (県) 高女に変更 B 曾根とく (音, 体)
		11 (県) 越ヶ谷高女S3 ※ (町) 実女として設立, S5 (県) 高女に変更 A 萩原美代三郎 [M39 乙]

備考：『埼玉県教育史』第5巻、『中等教育諸学校職員録』より作成。

(高)は高等女学校, (実)は実科高等女学校, (県)は県立, (郡)は郡立, (町)は町立, (組)町村組合立を示す。
Aは音楽の専科教員, Bは兼任教員, Cは音楽担当教員がないことを示す。()内に担当教科を略記する。
習は習字, 作は作法, 遊は遊戯, 手は手芸である。東音卒の教員は[]内に卒業年と学科を略記する。

の浦和、熊谷、川越の3高女と「元実女」の久喜、忍、小川の3高女で教えている。昭和5年に「元実女」となった粕壁、秩父、児玉、飯能、越ヶ谷の5高女は、いずれも高女変更時に東音卒の教員を手配できなかった。

なお、「元実女」の粕壁高女は、実女時代と高女時代の音楽教員の氏名と在職期間が判明したので次に示す。

粕壁実女時代の教員

杉浦三江（訓導）	在職期間不明
萩原美代三郎（囑託）	大正15年4月～ 昭和5年3月 東音乙師明治39年卒

粕壁高女時代の教員

石原儀平	昭和5年4月～ 昭和5年10月
安孫子（旧姓増田）操	昭和7年11月 ～昭和12年5月 東音甲師昭和2年卒

以下略

上記の教員のうち、実女時代の杉浦三江は訓導とあるので、併設の粕壁高等小学校の教員で兼務したとみられる。杉浦の後任は、乙師卒の萩原美代三郎であるが、昭和5年4月の高女への変更時に離任した。（表2によれば、萩原は「元実女」の越ヶ谷高女へ異動した。）しかし、甲師卒の音楽教員の手配は手間取り、同7年に安孫子（旧姓増田）操が同じ「元実女」である小川高女（表2参照）から転任してきた（埼玉県立春日部女子高等学校1984）。こうして「元実女」の粕壁高女は、東音卒の音楽教員が教えるという点でようやく浦和、熊谷、川越の「元から高女」と肩を並べたのである。

3. 「元実女」と甲種師範科卒業生

今度は、東音側から「元実女」というポストを検討しよう。明治以来、東音甲師の卒業生は、全国の高等女学校に赴任したが、表2を見ると、同じ高女でも「元実女」に赴任した者は、昭和5年の小川高女の増田操の1名のみである。そこで、表2と同じく、大正10年、同15年、昭和5年の時点で、甲師を卒業し、「元実女」に新卒採用された者を

『中等教育諸学校職員録』で調査したところ、次のようになった。

大正10年甲師卒（全23名）のうち、「元から高女」に新卒採用された者は9名であるのに対して、「元実女」に新卒採用された者は次の2名である。

- 1 小倉三江（町）玉島高女（岡山）
M44（町）実女として設立。
- 2 須子チカ（県）郡山高女（奈良）
M44（町）実女として設立。
※奈良女師と兼務
以上、2名。

大正15年甲師卒（全27名）のうち、「元から高女」に新卒採用された者は13名であるのに対して、「元実女」に新卒採用された者は次の2名である。

- 1 佐藤ハナ（県）涌谷高女（宮城）
T8（郡）実女として設立。
- 2 阿形正吉（県）山梨高女（山梨）
T6（郡）実女として設立。
※山梨女師と兼務
以上、2名。

昭和5年甲師卒（全24名）のうち、「元から高女」に新卒採用された者は15名であるのに対して、「元実女」に新卒採用された者は次の1名である。

- 1 篠原としゑ（県）宇部高女（山口）
T6（私）実女として設立。
以上、1名。

甲師を卒業し、「元実女」に新卒採用される者は少数派であった。そのような少数派の一人として、大正14年に甲師を卒業し、群馬県の「元実女」である太田高女（大正10年創立、同12年に県立高女）に新卒採用された松田（旧姓永山）文代の事例を取り上げよう。

太田高女は、早期の県立高女への変更を織り込んで町立実女として開校し、2年後には「元実女」になった。しかし、変更時には音楽教員を手配できず、次に示すように、松田の着任以前は群馬県師範学校の卒業生が唱歌・音楽を担当しており、音楽の専科教員としては松田が初代である。

太田実女時代	
間々田寛作	大正10年3月31日～大正11年9月19日 教諭（唱歌）。群馬師範卒、併設

の太田尋常高等小学校と兼務。

太田高女時代

栗原（旧姓富田）資三郎 大正12年4月10日
～昭和12年3月31日，書記兼教
諭（数学，音楽），群馬師範卒。

松田（旧姓永山）文代 大正14年3月31日～
昭和12年3月31日，教諭（音楽，
作法），東音甲師大正14年卒。

新人の松田に校長が命じた初仕事は校歌の制定で
あり，松田は母校の教授に作詞，作曲を依頼した⁽⁴⁾。

赴任するとすぐ，加畑徳次郎先生のお言付けで校
歌の制定を託されました。そこで私は，母校の教授
でありました高野辰之先生と島崎赤太郎先生（和声
学）の両先生にお願いしました。高野先生には太田
地区の地図と名所旧蹟である金山城，高山神社，新
田神社，利根川，松の木等を書いてお願いしました。
島崎先生は近よれない，こわい先生でしたが，高野
先生のお口添えもあって立派なものことができました。
私としては，「太田のここ」（筆者注．校歌の「太田
のここに立てられし／わが学校は尊しや」という歌
詞のうち下線部分）と言う所のアクセントが気に入り
ませんでした，島崎先生は地方なまりなどに合
わせてくださったそうです。謝礼は関校長の時代にな
り，両教授に二十円づつお包みしたと思います。
私が届けることに決り，その時代にしてもあまりに
少ないので上京して，デパートで品物を買って添え，
恐る恐るお届けしたことを覚えております。

校歌制定をめぐって，田舎者で融通の利かない校
長と気難しい東音教授との間に立って松田は苦労し
た。さらに，ピアノも音楽室もないところから始ま
った音楽教員人生を松田は次のように回想している。

私が赴任した時はオルガンが三台しかなく，音楽
専門の先生は初代とのことでした。父兄方のお供を
して，東京三田の竹内楽器店でグランドピアノ「ホ
イリッヒ」（ドイツ製）をかかっていただきましたが，
当時としては相当高価なものでした。その頃の校舎
は二階建一並びだけで，生徒は四年と三年が各五十
人，二年と一年は一〇〇人で二クラスずつあり，県
立になったばかりだったとのことでした。音楽室は
なく，講堂で授業をしました。夏は涼しいのですが，

冬は火鉢一つで手を温めてはピアノを弾いたもので
す。殆ど農家の方が多くて，音楽とは程遠い感じで
幾度か失望したものです。

松田は，田舎町の「元実女」に赴任した新人音楽
教員の孤独と侘しさを率直に述べているが，それは
本人が勤続12年もの教育功労者となったからこそ
言えるのであろう。卒業生の岡ゆきも，「オルガン
しかなかった母校にピアノの購入やら音楽教室の設
備等に努力され，創立時代だけになにかとお忙しく
ご苦労もあったことと思います」と回想している
（群馬県立太田女子高等学校1973）。

4. 「元実女」と第四臨時教員養成所卒業生

次に，甲師と比較するために，第四を卒業し，
「元実女」に新卒採用された者を『中等教育諸学校
職員録』で調査する。ただし，第四は大正11年の
設立なので，大正15年と昭和5年の新卒者を対象
とする。

大正15年第四卒（全22名）のうち，「元から高女」
に新卒採用された者は15名であるのに対して，「元
実女」に新卒採用された者は次の6名である。

- 1 金山キミ（市）富山市高女（富山）
T2（市）実女として設立。
- 2 高橋昭夫（県）松橋高女（熊本）
T7（郡）実女として設立。
- 3 高桑美世（県）篠山高女（兵庫）
M45（郡）実女として設立。
- 4 山田重（県）八幡高女（岐阜）
T7（町）実女として設立。
- 5 山崎君江（県）伊勢崎高女（群馬）
T4（町）実女として設立。
- 6 平田秀（県）日出高女（大分）
T6（組）実女として設立。

以上，6名。

昭和5年第四卒（全43名。第四の設置期間では
最多の卒業生数である）のうち，「元から高女」に
新卒採用された者は18名であるのに対して，「元実
女」に新卒採用された者は次の17名である。

- 1 池田かく（県）山梨高女（山梨）
T6（郡）実女として設立。
※山梨女師と兼務
- 2 長谷川チヨ（県）氷見高女（富山）

- T3(組)実女として設立。
- 3 小川泰 (県) 伊勢崎高女(群馬)
T4(町)実女として設立。
- 4 尾形登美 (県) 糸島高女(福岡)
T10(組)実女として設立。
- 5 岡田香積 (県) 掛川高女(静岡)
T2(町)実女として設立。
- 6 海峰義英 (県) 山鹿高女(熊本)
M45(組)実女として設立。
- 7 河合ワカ (県) 萩高女(山口)
T9(郡)実女として設立。
- 8 牟田口彌壽枝(県)小城高女(佐賀)
T3(組)実女として設立。
- 9 桑野チエ (県) 野沢高女(長野)
M44(町)実女として設立。
- 10 栗原静枝 (庁) 真岡高女(樺太)
T14(庁)実女として設立。
- 11 栗田よし (県) 武儀高女(岐阜)
T10(組)実女として設立。
- 12 山本彌吉 (県) 倉吉高女(鳥取)
T3(組)実女として設立。
- 13 矢澤クニ (県) 橋本高女(和歌山)
M44(町)実女として設立。
- 14 近藤栄 (県) 島原高女(長崎)
M45(私)実女として設立。
- 15 佐々木道夫(県)粉河高女(和歌山)
T2(町)実女として設立。
- 16 菊地澄子 (県) 一関高女(岩手)
M44(郡)実女として設立。
- 17 島村タカ (県) 宮古高女(岩手)
T12(町)実女として設立。

以上、17名。

「元から高女」は甲師卒を採用する傾向にあるので、甲師卒を採用しにくい「元実女」では第四卒を積極的に採用した。第四卒の採用校は東京では1校もないが、地方校では樺太から九州まで及ぶ。第四は音楽教員の増産という任務をこのような形で果たしていた。ただし、第四卒でも、採用人数の上では「元実女」よりも「元から高女」の方が上回っており、「元から高女」、「元実女」を問わず、高女の音楽教員は不足していたことがうかがえる。

5. 高等女学校音楽教員への二つの道

「高等女学校令」公布後、大正から昭和初期にかけて高女が増加した要因には、高女の新設だけでなく、実女から高女への組織変更があった。実科より本科志向が高まる時期には、実女から高女への変更は「昇格」を意味する。それゆえに、高女の特権であった「音楽」の専科教員の獲得は、「元実女」にとっては裁縫学校から脱し、合唱やピアノの演奏が日常化していた「元から高女」に追いついた証しとなるだろう。全国の「元実女」は、当時、最もブランド力のあった東音卒の教員をこぞって求めた。しかし、ただでさえ深刻な音楽教員不足は「元実女」に厳しく、東高卒の採用では「元実女」は「元から高女」に遅れを取っていた。

音楽教員は売り手市場であり、東音卒業生から見ると、意欲はあるかもしれないが、つい最近まで小学校の唱歌レベルであった「元実女」は、ポストとしての魅力や価値が「元から高女」よりも一段低く映っても致し方ないだろう。実際、「元実女」には音楽室やピアノが未整備のところが多かった。求人が多い「元実女」で音楽教育のパイオニアになるか、それとも、明治以来の名門校も含まれる「元から高女」にこだわるか。高女の音楽教員への道は二つに分かれた。そうすると、音楽教員養成の王道である甲師の卒業生は「元から高女」に赴任し(あるいは「元実女」に赴任するのはきわめて稀であり)、即戦力として養成された第四の卒業生は「元から高女」にも「元実女」にも赴任していったのである。

注.

- (1) 実女から高女への変更には、郡立、町立、組合立実女が郡立高女を経て県立高女になったり、女子職業学校が郡立、町立、組合立実女になり、さらに県立実女を経て県立高女になったり、さまざまな経過がある(高等女学校研究会1990:144-148)。
- (2) 実科高等女学校と高等女学校の主な相違について、「実科高等女学校の学科目には外国語・音楽がなく、代わって裁縫が高等女学校よりも4時間多く、音楽ではなく唱歌となっている」という指摘もある(水野1989:59)。
- (3) 表1の中から富山県の魚津実女(大正2年設立、同10年に県立高女)を例にとると、「専任の先生

は四、五名で国語、数学、裁縫などを担当し、図画、唱歌、体操などは小学校教諭の兼任であった」という（富山県立魚津高等学校1978：171-172）。

(4) 東京音楽学校には全国から校歌の作詞、作曲の依頼があった。ただし、現存する「作曲委託関係書綴」には太田高女のものは見えない（東京芸術大学2003）。

参考文献

- 高等女学校研究会（1990）『高等女学校の研究』（高等女学校資料集成別巻）東京：大空社
- 埼玉県教育委員会（1972）『埼玉県教育史』第5巻
さいたま：埼玉県教育委員会
- 財団法人芸術研究振興財団、東京芸術大学百年史編集委員会（本文中では東京芸術大学と略記）
（2003）『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第2巻、東京：音楽之友社
- 坂本麻実子（2008）「第四臨時教員養成所における音楽教員の養成」『桐朋学園大学研究紀要』第34集、12月、55-67頁。
- ノーベル書房編集部（1987）『思い出の高等女学校』東京：ノーベル書房
- 水野真知子（1989）「女子中等教育史における実科高等女学校—その実態と存続をめぐる考察1—」『立教大学教育学科研究年報』第33号、49-62頁。

※学校史は次のとおり。

- 秋田県立能代北高等学校（1984）『創立七十周年記念誌』
- 群馬県立吾妻高等学校（1971）『吾妻高校五十年史』
- 群馬県立太田女子高等学校（1973）『太田高校五十年史』
- 埼玉県立春日部女子高等学校（1984）『向日葵 創立七十周年記念誌』
- 富山県立魚津高等学校（1978）『魚高八十年史』
- 新潟県立佐渡女子高等学校（2004）『新潟県立佐渡女子高等学校九十年のあゆみ』

（2008年10月20日受付）

（2009年1月21日受理）